

労協連だより

記録破りの猛暑も、盆明けと共にようやく和らぎを見せ始めた。海外に目を向ければ、アテネの地でのゴールドラッシュに国中が沸き立っている。国内でも、夏の風物詩・甲子園物語が後半に突入した。何か「変わり目」を予感させる夏だと思うのは、気のせいだろうか。

暑い日差しの中、8月前半は、協同集会成功に向けた、第1次の集中行動が1週間取り組まれた。その前半に参加して感じたのは、協同集会に「新しい風」が吹く予感だ。前回の千葉集会の流れを受け、この1年間での公的存在へと高まりを見せた「協同労働」をさらに普遍化する決定打は、自治体からの圧倒的な賛同と参加の獲得である。その序盤は、田中知事の登場と寺島氏の講演ではずみがついた。そして、今回の集中行動は、集会成功の鍵となる長野市周辺での行動だった。そしてその中心を「自治体」におき、県・長野市を始め、遠くは松本や諏訪周辺にまで足を運んだ集中行動である。前半の県・長野市を回って感じたのは、協働・パートナーシップという抽象的なスローガンから、「協同労働による市民の仕事おこしと新たな公共事業の創造」を語り合うに絶好の機会がめぐってきたということだ。その舞台としても、長野は最適だった。今回の行動で、チラシ6,000枚・ポスター150枚が自治体関係で活用されることになった。長野県庁には、関係各課の部屋や、各階のエレベーターホールなど、いたるところに協同集会のポスターが張られる状況だ。後援自治体は20を超える勢いだ。何度か協同集会に関わって

古村伸宏（日本労協連・事務局長）きて、これほど自治体とコミットし、参加が見込まれるのは始めてである。ここに今回の特徴が凝縮されている。また、遅れ気味だった実行委員と労協・高齢協のメンバーのかかわりも、この集中行動で自信を深め、弾みがついてきた。みんなで燃える暑い夏を引き継いでいきたい。協同総研の会員各位の参加も、早めにお願ひします。

25周年を記念しての第1弾「地域再生・就労創出」7.24集会が催され、各界から100名が集い、政策についての意見や方向性を深め合う討議が行われた。全労働・連合・ILO・協同組合学会・経産省などからのミニ講演の中で、政策への助言も頂いた。このシンポジウムの成功を受け、自治体への本格的な政策提案の行動を経て、9月18日の記念シンポジウムへと、25周年の記念行事は続く。9.18には、ILOの協同組長部長やイギリス協同組合連合会からの参加が確定しており、これに、連合・笹森会長らも交えた国際シンポジウムとして国連大学で開催されることとなった。四半世紀の節目に、労協連の歩みが今一度歴史的な検証を得て、未来志向に組合員の希望にかなうものとして踏み出される秋である。センター事業団の社会連帯委員会作りも、様々な構想が膨らみ、秋の結成に向かっている。全国で、「新しい公共性を担う」協同組合・組合員としての自らを問い返しなが、秋のロードでしっかり足跡を残したい。海と夕陽に洗われた心と体をたよりに、新たな可能性と希望が芽吹き収穫できる秋に。みんなが主役の秋に。